

高津区おはなしアーカイブ

● 廣部 和男（ひろべ かずお）さん

昭和11年日生まれ 77歳

川崎市高津区諏訪在住



鵬洲流吟詩道会本部宗家

川崎市吟舞連盟常任相談役

神奈川県詩吟文化連盟常任相談役

にっぽん吟と舞の会本部事務総長

◆ご自身について教えてください

ぼくは瀬田、諏訪、あの辺り多摩川の川縁で生まれ育ちました。父親は神奈川県庁に勤める役人。堅くて真面目な人でした。母親は瀬田で「廣部女塾」というお和裁の塾を開いています

た。昔はお嫁入り前に裁縫を習うのは良家の子女のたしなみだったので、少し余裕のある家庭のお嬢様達が習いに来ていました。母親はお針を教えるだけでなく、内弟子もおりましたので「しまや呉服店」から着物を仕立てる仕事を頂戴し、納めていたようです。私は四人兄妹の次男で、上の二人が男、下の二人が女です。

◆子どもの頃どんな遊びをしていましたか？

昭和10年代、遊び場は多摩川。小学校から帰ってくるのと六尺のさらし、ふんどしを巻いて、自宅から川まで行って行っていました。その頃はふんどし一つでも恥ずかしくないのです。大人だつて下着、ランニングにステテコをはいていても可笑しくない時代でしたから。

友達とふんどし一つで多摩川に行つて、泳いだり釣りをしたりして遊びました。多摩川は今よりも水量は多かったですね、魚もいっぱいいましたから、子どもでも獲れたのですよ。

「あんま釣り」っていつて、竿にテグス、糸をつけてね。川のなかの石をひっくり返すと石の裏にチョロ虫ってちよろちよろって動く虫がいて、それを捕まえて餌にして、針にかけて「あんま釣り」。杖で探りながら、その頃はハヤだと

かヤマメだとかそんなのがたくさん獲れました。それを猫じゃらしに吊すのです。猫じゃらしは下が太いから落ちないでしょ、あれに何匹も魚を吊して、ふんどしにかけて持つて帰るのです。餌のチョロ虫が死んじゃうといけなからときどきちよつと水をかけてね。楽しかったですよ。

河原には雲雀が鳴いて、天高く。土手に登ったり、寝転んだり。花だつて、レンゲやタンポポじゃなくて、あそこはすつと桃や梨が植えられていましたから、桃の花だとか梨の花だとか川縁一面に咲いたときは、桜の花が咲くように綺麗でした。桃や梨が終わると、今度は桜。ずつと堰堤にたくさんあつたのですよ。お花畑ですよね、あの頃は。

梨だとか桃だとか実がつくと、子どもはちよつと盗んじゃう。みつかると怒られたけど。そういうのどかな生活でした。

◆小学校時代の様子はいかがでしたか？

小学校時代はまさに戦争中。国民学校初等科の一年生。「こまいぬさん あ、うん」とか「さいた さいた さくらがさいた」という国語の教科書を使っていました。その当時、まだ東高津小学校がなかったので、高津小学校まで歩いていきました。子どもの足だと20分くらいで

すかね。遊びながら帰ってくるからもつとかか
ったかもしれない(笑)。登下校も頭巾かぶっ
て、頭巾持って、ゲートルを巻いて通っていま
した。戦時中だから「分団」になって、上級生
が何人か連れてね、今でいう集団登校ですね。

学校の前には「週番」になった上級生が、長い
棒を持って立っていました。「歩調をとれ〜」っ
て号令をかけ、兵隊みたいな真似してね、低学
年の子も敬礼をして入っていくのです。軍国主
義の時代でしたからね、兵隊の真似をしていた
のですね。

学校には二宮金次郎だけじゃなく、奉安殿が
あり、そこには教育勅語が入っていました。

子どもの頃は大山街道にも馬車が通っていて、
牛の糞だの馬の糞だとか落ちていました。街道
を通って肥やしを運んでいたのです、肥桶を積
んでね。牛や馬でも運ぶし、馬も自分でうんち
するのもあるし。それが乾燥するとホコリにな
る。子どもの頃は乾燥した馬の糞を踏むと背が
大きくなるって。喜んで踏んだりしていま
した。そんなことしながら学校に通っていまし
た。

◆戦争について、思い出はありますか？

高学年になると、この辺りも空襲が激しくな

り、もうほとんど学校にはいけなくなりました。
高津小学校は閉鎖され、子ども達は大山に集団
疎開に行くことになりました。私は、身体の具合
が悪かったので親が縁故疎開させるからと集団
疎開に行き損ねました。

空襲はほぼ毎日ありました。夜は電球に黒い
頭巾をかぶせて、灯りが外に漏れないようにし
ていました。ラジオから「敵は御前崎から侵入
して、鹿島灘に遁走せり」と空襲警報が毎日何
度も発令されました、あの頃のラジオ、まだ頭
に焼き付いています。

警報が鳴ると、私は兄と一緒に下の妹をひと
りずつ抱えて、防空壕に潜りました。母親は婦
人会のバケツリレーに出て、火を消さなきゃい
けないし、父親は役人でしたから仕事に出なき
やいけない。だから子どもだけで防空壕に潜り
ました。

多摩川の河原でのんびりしていても頭上にB
29が飛んで来ました。下から、日本の飛行機
が威嚇しに行くのですが、その高さまで届かな
いのです。トンボの下にハエが飛んでいるみた
い、そんな情景も見ていました。

子どもでしたけど、飛んでいる音でB29だ
ってわかるようになっていました。カーチスだ
とか機銃掃射をする戦闘機と違って、B29は

エンジンのゴロ〜ンゴロ〜ンっていう音が飛行
機の音のなかに入ってくるのです。ああ、これ
B29だなって。子どもが飛行機の音を聞き分
ける、そんな時代でした、ぼくの少年時代は。

終戦の直前には高津区内でも空襲があり、焼
夷弾も落ちたし、爆弾も落ちました。東京の空
襲のときには世田谷のほうから焼け出されて来
た人たちが大勢多摩川を渡って逃げてきました。
裸足で、着の身着のまま、荷物もなにも持たな
いで、ボロボロになって、今のホームレスより
もひどい状態で、多摩川を渡って来ました。空
襲で目をやられて、くっついてしまったり、涙
で真っ黒になっていたり、ひどい有様でした。

一度、今の麻生区か緑区の方だったかな、場
所が確かじゃないんだけど、B29が落ちたっ
ていうので、父親の自転車と一緒にくっついて
見に行きました。不謹慎ですよ。飛行機か
ら少し離れたところにアメリカ人の搭乗員で亡
くなっている人が2人ばかりいました。家族の
写真みたいなのがいっぱい散らばっていて、遺
体が転がっていました。もう1日〜2日放置さ
れていた様子で、腫れて、浮腫んでいて。す
ぐに葬るってことをしないで、晒し者にしたの
ですね。遺体を棒で突つく人もいましたし
。そういう情景も子どもの頃に見ました。

もう戦争は嫌です：。

終戦のときは、天皇陛下の玉音放送を親と一緒に並んで聞きました。何を言っているのかは、よく聞き取れなかったけど、負けたということをお知らせされて：。そして、親も畑のところを深く掘って、お米だとか味噌だとか砂糖だとかをアメリカ人に盗られちゃいけないって、ブリキの缶に入れて畑に埋めたりしていました。今考えると滑稽ですが、当時は占領されて、何をされるか不安だったのでしょね。

◆戦後、街の様子は怎么样了なりましたか

旅館の亀屋さんは、終戦後進駐軍に買取されてダンスホールとして利用されました。「セブンマイルハウス」というダンスホールで進駐軍兵士達の社交場になっていました。アメリカ人ばかりではなく、日本の女性も入って踊っていましたよ。私の小学校の先生もそこで進駐軍と一緒にダンスをしていたのを見ました。「セブンマイルハウス」が営業していたのは戦後2〜3年ぐらいだったかな。その頃は、進駐軍が大勢いたので、日本の女性も一時、乱れていたのです

ね。物資がない時代でしたから、アメリカ兵と付き合えば甘い物や美味しい物がもらえたり、缶詰がもらえたり。なかには進駐軍相手に営業する人もいましたから。

二子橋の辺り、二子の河川敷に進駐軍は一時期テントを建てていたので、この辺りにはたくさん兵隊がいました。びっくりしたのは、建設の重機、大きなブルドーザーが来て、あつという間に河原の土地を平らにし、そこにテントをたくさん張って、自炊していました。テントのあとはかまぼこ兵舎を建て、自分たちのキャンプを作っていました。

◆終戦後、ご自身はどうされましたか？

小学校を昭和23年に卒業し、中学校は自由が丘にある「自由が丘学園」に進学しました。校長が「君達は自由が丘学園に来て自由だと思えようけど自由主義というのは不自由だ」ということを、入学してすぐにいわれました。それは、自由の裏には義務がある、それを果たしての自由なんだよ、という話でした。子どもの頃は頭のなかは軍国主義でいっぱいになってやってくる、いきなり自由って言われても最初は戸惑うばかりでした。

自由が丘学園には中学・高校と六年間通いま

した。その頃は多摩川のこっち側は「田舎っぺ」っていわれてね、いじめじゃないけどね、やっぱり一つ下に見られていました。級友はみんな東京の子でしょ。ここの言葉は訛っていたのです。今でもここら辺の年配者と話をするとときどき訛りが出てきますよ。

子どもの頃は「あそんべよ」「そうだべ」そういう言葉でしたが、それがひよろつと口をついて出てしまうのです。川の向こうからすれば、川のこっちがわは昭和20年代はまだ田舎っていわれていたかな。

今の鷺沼、野川から来ている友達に溝ノ口まで自転車に来ていました、溝ノ口に自転車を置いて電車ですうのです。その当時の彼らの悩みはね、言葉の訛りだけじゃなくて鉛筆の折れ芯。舗装されていないでこぼこの道を自転車に乗ってくるでしょ、そのとき筆箱がカタカタ揺れて、鉛筆の芯が折れちゃうのです。子どもの頃は鉛筆一本でも貴重だったから、ポケットに入れて大事にしていました。そんな時代。

◆戦後、ご家族はどうされましたか？

戦後、母親は着物の仕立てやお針を教えるだけでは食べていけなかったのです、建物を利用し

「春華ホテル」をはじめました。このホテルは昭和50年代の半ばくらいまで営業していましたが、母が老いたので廃業しました。三業地とは離れておりますが、料亭「やよい」の山本さん達と同じ旅館組合に属しておりました。ホテルといっても、宿ですね、割烹の宿。宿泊や宴会、そして結婚式などをやっていました。

その頃周りを見渡してもホテルと名乗っていたのは、「二子ホテル」、「高津ホテル」、小杉のほうに「精養軒ホテル」がありました。内容は旅館みたいなものですが「ホテル」に憧れてそんな名前をつけたのですね。

料理は板前さんに任せていましたが、母親も有名な料理人に習いに行つて、刺身を切つたり、野菜を煮たり、お客様に出す料理も手がけていたようです。お客様は行商の人、たとえば富山の薬屋さんとか、出張で来た人とか、近くの工事現場の仕事が終わるまで長逗留させてくれとか、戦後は人の動きが出てきましたから繁盛していたと思います。

私も、仕入れのときに車で食材を運ぶ手伝いもしました。当時は二子新地の砂利採取場あとに北部市場があり、そこまで仕入れに行っていました。

遠い親戚ですけど、高田敏子(たかだとしこ

という詩人がいます。春華ホテルをやっていた頃、その人は東京(在住)だから、ゴミゴミしているついでなので、こちらへ来て、多摩川の畔で滞在しながら詩を書くとか、そんなこともありました。

父親が昭和31年に亡くなり、母親と子どもだけになると、近所の商店街の人達の態度も変わってしまいました。母親も女塾をやったりホテルをやったり、目立つようなことをやっていたので、妬みやつかみもあったのでしょう。駅前の看板が壊されたり、防犯灯が倒されたり、家の中は今どうなっているとか言つて、ドカドカと上がり込んできたり、いろいろ横暴なこともありました。大学をあと1年で卒業する年齢になっていましたから、これは、うちのそばで男がしっかりしないと駄目だなんて、ホテル横に蔵を建てて、質屋をはじめました。

この質屋は生活の手段でした。若かったのですがただ座ってお客さんを待っていることが性に合わず、副業で自動車屋を諏訪で開業しました。

昭和40年代、川崎の公害問題をきっかけに、子どもたちの体力作りのため、諏訪にトレーニングセンターを開設、瀬田でスイミングスクールを建てて多くの子どもたちを指導してきました。私は子どもの体力づくりのためにこの仕事



をしてきましたが、時代と共に、競泳選手育成を目的にした大手企業が参入してきました。私自身体力が衰え、指導ができなくなつてしまつたので両施設ともたたみました、今はマンションになっています。でも、子ども達に囲まれて、やってきたことが、今振り返ってみると一番やり甲斐があつたと思つています。

(平成25年10月9日)